

科学研究費助成事業 研究成果報告書

令和 2 年 6 月 8 日現在

機関番号：32670

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2016～2019

課題番号：16K06696

研究課題名(和文) 中近世の神社の維持保全に関する建築史学的研究

研究課題名(英文) Architectural History Research on the Maintenance and Preservation of Shrines in the medieval and early modern times

研究代表者

是澤 紀子 (KORESAWA, Noriko)

日本女子大学・家政学部・准教授

研究者番号：40431978

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,600,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では中近世の神社を対象として、神社建築と境内を含む山林が一体となって形成してきた神社の保存・再生について検討を行った。その結果、境内の変化と後背林の植生の変化には信仰対象の変化に基づく相関を示した。社殿背後の植生の在り方は神社にとどまらず寺院の鎮守社にも共通性が見出せる。また春日大社より移築した旧社殿の分布調査からは淀川水系および大和川水系の河川近くに立地する傾向にあることが確認できた。神社建築の細部装飾のうち暮股の事例からは、工匠の移動により地域を超えた意匠の継承が見出せるとともに、内部彫刻の付加や類例の制作など中世の維持保全の一端が見出せた。

研究成果の学術的意義や社会的意義

神社の保存・再生は、自然環境の保存・再生と密接なかわりを持っている。しかしながら、信仰の場の一部として、神社建築とともに維持保全されてきた近世以前の手法については不明な点が多い。とりわけ自治的な村落が成立した中世後期には、人々と神社との深いかわりが指摘されてきたが、中世後期から近世にかけての神社建築および境内、その周辺環境の変化を追っていくと、いかに神社建築や境内の構成に新たな文化を取り入れて適応させてきたか、それらの整備の際に人々が求めた環境の創造と維持保全への視点を理解することが可能となると考えられる。

研究成果の概要(英文)：This study examines the conservation and regeneration of a mid-modern shrine through the integrated use of architecture and forest conducted. The results showed that the changes in the architecture and hinterland correlated with the changes in the objects of faith. The vegetation of the hinterland is not limited to shrines, but is also common to the hinterland of the temple's shrine guardians. It was also found that the old shrine buildings, which were relocated from Kasuga Taisha, tended to be located near the river. The case of toadstools, one of the detailed architectural ornaments of shrine buildings, shows that the transfer of designs from one region to another has been achieved through the transfer of artisans. In addition, the addition of internal carvings and the production of similar examples were part of the maintenance and preservation of the medieval period.

研究分野：文化財保存

キーワード：神社 本殿 中世 近世 維持保全 建築史 文化財 境内

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

神社の保存・再生は、自然環境の保存・再生と密接なかかわりを持っている。しかしながら、信仰の場の一部として、神社建築とともに維持保全されてきた近世以前の手法については不明な点が多い。この観点から、本研究代表者は山を御神体としてまつる奈良県の大神神社に着目し、三輪山を選擇する中心施設である拜殿と境内の整備、そして三輪山における禁足の制定が一体的に行われてきた実態と保護の思想、その変遷について、文献・絵図等により明らかにしてきた(是澤紀子「近世三輪山における禁足の制定とその景観 - 神社の禁足地とその景観に関する研究 - 」日本建築学会計画系論文集 700, pp.1433-1439, 2014 など)。一方、神社建築や境内に関して、建築史学の先行研究をふまえて文化財修理工事報告書及び現地調査をもとに検討し、神社本殿の建築形態と細部装飾、神社境内そして周辺環境を分析して、それらが相互に関連して成立していることを明らかとしてきた(是澤紀子「畿内南部における中世神社の聖なる場所に関する考察 - 神社の表徴にみる空間の変容 - 」日本建築学会計画系論文集 558, pp.309-314, 2002.8 など)。とりわけ自治的な村落が成立した中世後期には、人々と神社との深いかかわりが指摘されてきたが、中世後期から近世にかけての神社建築および境内、その周辺環境の変化を追っていくと、いかに神社建築や境内の構成に新たな文化を取り入れて適応させてきたか、それらの整備の際に人々が求めた環境の創造と維持保全への視点を理解することが可能となると考えられる。

2. 研究の目的

本研究の目的は、中近世の神社を対象として、神社建築と境内を含む山林が一体となって形成してきた歴史的環境としての神社の保存・再生について建築史的に解明することである。その際、神社建築の建立と修復の履歴を取り上げて、維持保全の実態を解明し、神社境内の整備や、周囲を取り巻く山林とがどのように相互に関連してきたかを探ることによって、総体としての神社におけるライフサイクルの特質を明らかにする。とくに新たな文化を取り入れて細部装飾が発展してゆく時期にあたる中世後期から近世にかけての神社本殿に着目し、それらが現存する神社を中心として、本殿建立を機に境内や周辺環境がどのように一体となって整備されてきたのか、また整備後の維持保全のために図られてきた手法について明らかにする。

3. 研究の方法

中世後期から近世にかけての神社建築と周辺環境からなる歴史的環境としての神社の保存・再生について建築史的に解明するため、中近世に建造された神社本殿の遺構が現存する神社を中心として、文化財修理工事報告書、古文書、絵図等の史資料を収集・分析したうえで、現地調査を行った。その際、近世社寺建築緊急調査報告書および国指定文化財目録を活用して、まずは基礎的なデータベース化を行った。現地調査対象の抽出にあたっては、本研究代表者がこれまでに全国の中世神社建築を対象に進めてきた「神社建築と信仰の景観に関する研究」(平成 24~27 年度科学研究費補助金若手研究)において、建築形態と細部装飾の発展に関して得られた成果をふまえ、かつ神社境内や山林の変遷に関する史資料が得られる対象を抽出した。

また修理工事報告書から、神社本殿の修理や境内整備の履歴とその内容について調査し、各神社に関する古文書や絵図等の史資料からは、建築の移築や建築部材単位におよぶ再利用、境内や周辺環境を形成する樹木や山林に対する維持保全の考え方と手法について検討を行った。

4. 研究成果

ここでは本研究の成果について、(1) 神体と信仰の景観にみる維持保全、(2) 建築の立地と形態にみる変化と保存再生、(3) 建築細部装飾にみる維持保全、の3項目について代表的事例をもとに報告する。なお本研究は平成 28~31 年度の4年計画であったが、最終年度に採択された新規課題を進めることとなったことから、本研究成果に基づく経緯と展望を(4)に記述する。

(1) 神体と信仰の景観にみる維持保全 諏訪大社を中心として

ここでは神体山をもつ神社について、自然環境と一体となった信仰の景観にみる維持保全とその特質を探った。大神神社と三輪山に関しては樹木や山林に対する視点が境内整備の時期と軌を一にして変化してきたことを明らかにするとともに(是澤紀子「近世神社の境内と自然:三輪山禁足地の近代化をめぐる(第二十三回国際神道文化研究会明治神宮「誕生」の前史を考える:境内と社殿の近世・近代)」神園(15), 明治神宮国際神道文化研究所, 査読無, 83-93, 2016.5)、諏訪大社と守屋山にみる信仰軸と保全との相関研究(一之瀬千遥・是澤紀子:諏訪大社上社本宮の信仰軸と樹木景観の変遷, 日本建築学会学術講演梗概集 2017 年度大会, pp.687-688, 2017.8)、熱田神宮と景観の研究(大倉彩乃・是澤紀子:熱田神宮の樹木景観とその歴史的背景に関する研究, 日本建築学会学術講演梗概集 2016 年度大会, pp. 427-428, 2016.8)他の発表を行った。

本殿をもたず背後に聳える山を神体山として選擇する神社のひとつ、長野県諏訪大社と守屋山では、境内の変化と後背林の植生の変化には信仰対象の変化に基づく相関が見出せた。社殿の変遷は4期に大別されるが、その過程における信仰の軸線の変化に着目した。従来の研究によると、室町前期は神体山・硯石を起点とする南北の軸線をもとに構成されていたが、室町後期には鉄塔が「御神前」に安置された後、祭祀や造営による再興があり、元和三年以降は鉄塔を本尊とし幣・拜殿が建立されることを経て新たな東西の信仰軸が形成されている。これをふまえて植生の変化をみると、境内林の絵図史料の描写ではマツ系の混じる植生からスギ・ヒノキ系が優占

する植生へと変化したことが見出せた。さらに南北軸の延長線上にある硯石の背後、すなわち旧境内地の後背林では、絵図史料においてマツ系やスギ・ヒノキ系の描写がみられたが、信仰軸の移行に伴い、次第に広葉樹系の自然植生に戻りつつあるのではないかと考えられる。これに対して、東西の信仰軸にみる鉄塔推定位置の「神居」ではスギ・ヒノキ系が残存していることにくわえ、近代以降の造成地の後背林では広葉樹系の自然植生がそのまま残された結果、現状のような樹木景観となっているということが推察できる。これより、樹木景観の変遷には信仰軸の変遷との相関関係があることを明らかにした。

これらの神社の樹木景観をみると、近世以前の針葉樹林を主体とした古絵図の描写や文書の記述に対して、総じて近代以降には混生林や常緑広葉樹主体の景観が確認できる。これはたとえば和歌山県長保寺のような寺院にある鎮守社後背林にも見出せる景観であることが指摘できる。

(2) 建築の立地と形態にみる変化と保存再生 春日大社旧社殿を中心として

移築された春日大社の旧社殿の立地には、河川など水運による建築流通と立地との関係も見出せた。移築そのものを取り上げた研究としては「建築の移築に関する研究」(2002-2004 科学研究費補助金研究成果報告書, 研究代表者: 藤井恵介)があり、移築が普遍的な営みであり、日本建築文化の一つの特質であることが指摘されている。春日大社では式年造替により旧社殿を他の寺社へ移築し本殿あるいは鎮守社社殿とする「春日移し」で知られ、それら旧社殿の移築に関しては奈良県を中心として多く現存するが、これまでも黒田昇義の『春日大社建築史論』(綜芸舎, 1978)などによって分布や移築年代等が明らかにされてきた。これらに対して本研究では、春日大社旧社殿の修理工事報告書等により規模や土台などの形態情報を収集して比較検証するとともに、従来あまり言及されなかった旧河川の古環境をふまえて河川との位置関係を検討した。

建立年代が判明している対象のうち、本社本殿を移築した旧社殿をみると、その形態の多様性がうかがえる。ここで、現存最古の春日大社旧社殿の可能性が示唆されてきた円成寺春日堂・白山堂では、本社本殿と異なり臺股をもつことが知られているが、旧社殿には臺股をもたない社殿が大半である。これら2棟は規模も間口および奥行きが1100mmと小さく、その他旧社殿との比較においては形態に特異性が認められる。

さらに、旧社殿の分布図を作成し、地形図と重ね合わせてみると、河川付近に比較的多く分布が見出せる。また、兵庫県の六甲八幡神社に社殿を解体せずに海路にて運搬した記録が残っていることから(神戸大学建築史研究室『兵庫県指定有形文化財(建造物)六甲八幡神社厄神宮本殿修理(災害復旧)工事報告書』六甲八幡神社, 2000)、水路を使用して運搬、移築した可能性が考えられる。旧社殿は、興福寺の社領地や春日大社神主にゆかりのある地へ移築されることがほとんどであったが、興福寺は多くの荘園を持ち、荘園内の川を支配していたことも知られ、旧社殿の分布図によって淀川水系にとどまらず大和川水系でも河川近くに立地していることが判明した。ここで、大阪府平野川に着目すると、元禄の付け替え工事が行われるまでは大和川の主流の一部であった河川であり、そこには旧社殿を移築した杭全神社が確認できた。淀川水系では、春日大社や興福寺に木材を運んでいた木津川があり、とくにその上流には興福寺の杣山が設けられていたことが知られ、旧社殿の分布が密集していることを明らかにした。すなわち材木を調達する場所や運搬する河川との相関が見出せるのである。

(3) 建築細部装飾にみる特質と維持保全 臺股を中心として

全国の中世神社本殿を中心に建築形態と細部装飾に関するデータを収集整理し、とくに中近世の変遷について修理工事報告書等から詳細に分析するなかで、たとえば和歌山県白岩丹生神社本殿などのように、本殿位置を後世に移築し後退させた事例があり、本殿背面装飾などの建築意匠の在り方や特質はこうした変化をとらえたうえで理解し得ることが指摘できる。建築の細部装飾をめぐっては、畿内を中心として工匠が判明している事例を比較し、各工匠別の神社本殿にみる特質を抽出して整理した。

京都や和歌山の工匠が桃山時代に宮城で手掛けた大崎八幡宮の臺股に着目すると、立体的な彫刻に極彩色が施されているが、臺股足元の繰形において二種類の繰形の系統が認められる。これは桃山時代まで奈良に多くみられた繰形(奈良系)と、京都や滋賀に多くみられた繰形(京都系)の二種類であり、大阪や和歌山の事例は奈良系に近いことが知られており(伊藤延男「臺股試論」『仏教芸術』第68号, 1968)、大崎八幡宮では工匠の移動を伴う意匠の継承がうかがえる。くわえて、大崎八幡宮では二種類の系統の臺股について、拝殿向拝や妻に京都系を用い、その他大半は奈良系とするなど、区別して配していることが指摘できる。なお、大崎八幡宮では臺股の大正期の修理時の復原模写が残されているが、このような記録は後世の文化財修理において参照されるように、今後の維持保全においても貴重な情報であるといえよう。

上記の記録とは異なり、現物においても維持保全の記録をみることもできる。たとえば平安後期の宇治上神社本殿では左殿と右殿にそれぞれ臺股があり、左殿の臺股は最古の本臺股として注目されてきたが、その内部の彫刻と、右殿の臺股は中世初期の可能性が示唆されている(吉井博『文建協叢書六 臺股』文化財建造物保存技術協会, 2006)。いずれも輪郭と別材の彫刻をもち内部には輪郭と別材の彫刻があるが、二材を結合した輪郭と内部彫刻の形態には類似点と相違点が認められる。このことから左殿では、平安後期の臺股を継承しつつ中世初期に内部に彫刻を付加するという中世の維持保全の一端が見出せるとともに、右殿では左殿の過去の臺股の輪

郭を継承しつつも足元を大きくし彫刻を施すなど細部に変更を加えて作り上げた可能性がうかがえるのである。

(4) 補足 前年度申請による平成31年度採択課題への経緯と展望

本研究において、とくに中近世の建築の変遷を修理工事報告書等から詳細に分析する中で、天王寺系工匠による和歌山県白岩丹生神社本殿などのように本殿を後世に敷地内で移築後退させた事例や、一間社春日造など他社からの移築も多く、本殿側背面の建築意匠の在り方や、造営に関与した工匠による建築特性はこうした建築の移動をとらえたうえで理解し得ることの重要性を認識するに至った。すなわち工匠による建築特性は本殿周辺の領域形成とともに、他地域の同系統の工匠による事例と比較しつつ深掘りし、考究していく可能性が見出せた。畿内における工匠たちの活躍を経て、桃山時代には宮城県仙台市の大崎八幡宮など地方へ畿内の工匠が移動し造営を行ったことは周知であり、本殿建築の在り方を領域形成とともに位置づけることも考えられる。以上より、今後は新規課題「中近世の神社にみる移動と再生に関する建築史学的研究」において、工匠の移動、建築の移動(移築)にみる流通に支えられた神社に焦点をあてて維持保全の実態を解明したい。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計5件（うち査読付論文 0件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 2件）

1. 著者名 井上実沙子・是澤紀子	4. 巻 2018
2. 論文標題 中世寺社建築の軒反りに関する技法の考察 奈良県の遺構における柱・組物・丸桁を中心として	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 日本建築学会大会学術講演梗概集	6. 最初と最後の頁 683-684
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 松橋萌香・是澤紀子	4. 巻 2018
2. 論文標題 明治神宮造営計画にみる建築・造営分野の相関 内苑と境外参道を中心として	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 日本建築学会大会学術講演梗概集	6. 最初と最後の頁 1041-1042
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 一之瀬千遥・是澤紀子	4. 巻 2017
2. 論文標題 諏訪大社上社本宮の信仰軸と樹木景観の変遷	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 日本建築学会大会学術講演梗概集	6. 最初と最後の頁 687-688
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 大倉彩乃・是澤紀子	4. 巻 2016
2. 論文標題 熱田神宮の樹木景観とその歴史的背景に関する研究	5. 発行年 2016年
3. 雑誌名 日本建築学会2016年度大会（中国）	6. 最初と最後の頁 427-428
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 是澤紀子	4. 巻 15
2. 論文標題 近世神社の境内と自然:三輪山禁足地の近代化をめぐって(第二十三回国際神道文化研究会明治神宮「誕生」の前史を考える:境内と社殿の近世・近代)	5. 発行年 2016年
3. 雑誌名 神園	6. 最初と最後の頁 83-93
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計2件(うち招待講演 0件/うち国際学会 0件)

1. 発表者名 大倉彩乃・是澤紀子
2. 発表標題 熱田神宮の樹木景観とその歴史的背景に関する研究
3. 学会等名 日本建築学会2016年度大会(中国)
4. 発表年 2016年

1. 発表者名 一之瀬千遥・是澤紀子
2. 発表標題 諏訪大社上社本宮の信仰軸と樹木景観の変遷
3. 学会等名 日本建築学会2017年度大会(中国)
4. 発表年 2017年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------	---------------------------	-----------------------	----